

千葉大学の17歳入学の意義について

前工学部長 齊藤 義明

人類の先導者

先ず映画監督の羽仁進氏の話から始めたい。15年近くも前のことであるが、大学祭の学生企画の催しで同氏が来学され、アフリカの話がされた。教養部の大講義室がほぼ満員の状態であったから500人位は集まったわけで、話を聞かれた教職員もおられることと思われる。同氏はアフリカのライオンの観察では第一人者として評判の高いことは周知の如くであるが、そこの小さな部族の話も当然興味の引かれるものがあった。アフリカは干ばつや豪雨に見舞われ、部族のほとんどの構成員は同じことを考えるが有効な対応策を見出すことが出来ず、部族の存続が危ぶまれる状況に追い込まれることがしばしばある。この時その部族を救う発言をする特殊な者が各部族に必ずと言ってよいほど存在し、何とか危機をしのいでいる。その者は日頃はどちらかと言うと周囲の人とは違って能力が偏っておりその部族の負担になっているが、各部族ではそういう者を大切に一緒に生活しているという。部族の存続に関わる危機に直面している人たちの生きる知恵であると解釈されている。

この話は、今ほど環境問題が注目されていない時期でのことで、世界中が存続の危機に曝されるとは思っていない世相でのことであった。

現在とは言う、エネルギー問題、食糧問題、人口問題そして地球環境問題（酸性雨、温暖化、排ガス、オゾン層の破壊、環境ホルモン、ゴミ処理等）と、どれ一つ取っても容易には解決しそうな問題が山積しており、人類はあと100年ほどでほとんど全滅してしまうのではないかと懸念されている時代である。そんなに悲観的になる必要はないとの考えを持つ人も多くいる。しかし、

日本では佐渡にしか生息していない朱鷺のことを考えてみると楽観的ではいられない。今から50年も前に既に一部の有識者の間では朱鷺の絶滅が懸念されていた。50羽を切った種の絶滅の危険性は小学生であった私にも理解できた。その後、本格的に対策がなされるようになったが手遅れであった。僅か1羽が生存しているだけでそれも高齢であり“日本の朱鷺”の絶滅は時間の問題である。

「人類はあと100年ほどでほとんど全滅してしまうのではないかと懸念」に対する科学的解決策を具体的に持っている人は世界中捜してもいないと言って良い。我々は今、この様な解決策を提案できる人物を必要としている。この様な人物は画一的教育からは生まれないのでなかろうか。

多様な人材育成の必要性

さて、戦後の新制大学では、高等学校を卒業または卒業予定の18歳（早生まれは繰り上げる）以上の者でなければ大学受験の資格がない。同様に大学に4年間在学しなければ卒業できない。（3年間在学で大学院の受験資格が得られる分野もあるが卒業ではない。）この様な画一的な制度のもと、画一的な教育を行って来ている。この様に平等を大原則として、同じ方向に向かって同じ考え方をする人材養成を行って来ている。国家が発展の時代、平和で満たされた時代にはこの様な考え方や制度はうまく機能し、評価される。しかし、一度問題が生じその解決が長期化する状況下では、画一的ものの考え方しか出来ない人間の集団を構成員とする国家ではその将来に不安を抱かざるを得ない。大学は高等教育機関として多様な人材を受

け入れ、バラエティに富んだ教育を行い、多様な価値観を有する人材を世に送り出すべき時期に来ている。人類の危機を乗り越える方法を提案できる人材が多方面から輩出して来るのがこれからの時代には不可欠と考える。平等主義の中からはほんの僅かでよいからドナーションとして持ち出し、特殊な能力を有する者の教育、特殊な能力を持ち得るような教育を実施することも試験的に試みなければならない時期に来ていると思われる。日本だけが人類の未来に貢献しないで他国の成果を享受する考えでいると、またぞろ“日本の技術ただ乗り論”で世界から“バッシング”を受けることになる。勿論こんな他国から非難を受けないようにするためだけで、困難な教育を実施しようとすれば直ぐに破綻が来てしまう。我々は若者教育にもっとロマンを持つべきではないか。若者の教育に対する自己の情熱が思いもよらない素晴らしい人材を育て上げ、彼らが世界に羽ばたき人類に貢献し得ることに思いをいたし、大学教員自身が楽しみながら日頃の教育に打ち込んで行く姿が望まれる。

千葉大学の制度

法令が改正になり、「高等学校（最近では中等教育学校）に在学する者で数学又は物理の分野において稀有な才能を有する者について、教育上の例外措置として大学入学年齢制限を緩和し、大学入学資格を認める。」こととなった。これを受けて千葉大学では「先進科学プログラム」を考え、これを実施するセンターを設置した。その目的は、日本の技術ただ乗り論に対応し、日本独自の技術開発の出来る人材を育成する事である。知識偏重から想像性・創造性・独創性の涵養へとシフトする教育研究の場である。

飛び入学を認める背景は以下のようなものである。、物理や数学が好きで能力があるならば早期に大学に入れて専門家による教育を実施する。一生懸命努力したい学生のなかに記憶中心ではなく独自の思考力を有する人材を発見する。目的意識を持

って入学して欲しいし、入学後は想像性、独創性を育む教育を実施したい。これらが大学改革に一石を投ずることになる。一人の学生に理系、文系夫々一名の指導教員がつき、数名の学生に対応する。全学的な取り組みで60名以上の教員が教育に対するロマンと情熱を燃やしている。大学の存続に対する危機感を持つ教員が多く居り、対応の必要性を感じている。世界で活躍する人材を教育し、世界に送り出す。21世紀で活躍する人材の育成を目指す。来るべき少子化社会における高等教育の在り方の試行を行う。

学生に対しては、入学後、個人セミナーを設け個性を磨き、適性によっては他学部への転学も考える。3年次からの大学院への飛び級も考慮に入れた試行を行い、大学院から外国の大学院へとつなげて行く。早期高等教育を実施し、自覚と使命感を持たせ、努力させる。この事が高等学校にもインパクトを与えられ考えられる。即ち、周囲へのチャレンジ精神の刺激と知的欲求の向上を促す。現代は多様化の時代であるが、その方向を年齢面において拡大し、当面は能力の評価しやすい数学・理科のみであるが将来的には文系でも実施する。

選抜方法は、先ず高校長の推薦を必要とするが、この際、大学と高校長は協議を行う。次に、独創性や思考能力を見るために、充分時間をかけて選考する。暗記主体の試験では得られない学生を選別する。例えば、人類が解を知らない事柄に対してどう考え回答するかをみるとか、高等学校ではやらない実験を充分時間をかけてやらせ、その結果を考察させる等である。

中教審でも、理系だけでなく文系でも飛び入学についての可能性が示唆されている。財政改革審議会でも、飛び入学は異質の能力を有する人材教育として期待されている。

むすび

以上の如く、飛び入学に関して千葉大学では新しい試みとして戦後の大学教育に新風を吹き込ん

だ。新潟大学としてはほとんど議論がなされていない状況であるが、先発大学を参考にして、本学独自の考え方を検討して行く必要があると思われるし、また、千葉大学に続く大学が現れないとこの制度は廃ってしまうとも考えられる。独自性の視点としては入学を1年早めることの意義の多方面からの検討等が考えられる。

本セミナーの後半で、「理系が飛び級を実施したければ実施すれば良いが、文系は協力しない。」

との発言があったが、人類の永続的存続を考えるとき、文系も理系もないと思う。理系の研究成果は文系を始め人類全体に影響を及ぼす。また、文系の考え方が理系の進むべき道を示すものであり、両者が影響し合っこそ人類の永続的存続と発展が可能となる。全学的議論の中で飛び入学が早期に実施されるようになることを期待したい。

(平成10年12月5日投稿)

以 上